

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

No.6 / 2007



Sadeco Inc.

椿 (庭の植物シリーズ 2)

## <今年の行事予定>

- |                                       |        |                        |
|---------------------------------------|--------|------------------------|
| 春の一般公開と健康フォーラム                        | 3月18日  |                        |
| 脂肪の摂取と心・体の健康                          |        | 大阪大学教授 杉田 義郎           |
| 音楽フォーラム                               | 4月22日  |                        |
| オルゴールを楽しむ集い—シリンダーオルゴールから手廻しパイプオルガンまで— |        | 畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田 耕一   |
| 第9回畑田塾                                | 5月13日  |                        |
| アフガニスタンのこどもたち                         |        | 宝塚・アフガニスタン友好協会代表 西垣 敬子 |
| 仕組みが分かると技術がつくれる—立体視を例に—               |        | 大阪大学大学院基礎工学研究科長 西田正吾   |
| 秋の一般公開と音のフォーラム                        | 11月18日 |                        |
| 日本建築と音の響き                             |        | 大阪科学館長・大阪大学名誉教授 高橋 憲明  |

## 「河内木綿」に想う

会長 畑田 勇

私どもの羽曳野市が、古来の幹線道路・竹之内街道に沿っていたことは、大変幸せなことであります。中国、朝鮮、西欧諸国から渡来したすばらしい文明が、堺港に上陸し、この街道を歩いて大和に伝えられ、文化的大遺産が数多く残されたことは誠に悦ばしいことであります。

私どもの生活様式、産業などの中にも融け込んでいるものが数多くあります。特に農耕に従事していた私どもの先祖は、勝れた農耕器具を採択して農業の振興に多大の貢献を致しました。

副業的に生産された「河内木綿」は河内の代表的特産品でありました。主要穀物米、麦の他に綿を栽培しました。直径5～6 cmの真っ白な綿の花が一面に咲いて、風に吹かれてユラユラと揺れている光景は、すばらしく良い眺めでありました。この綿花を摘み取って「綿くり器」にかけ、綿の実(種子)からもぎとります。さらに「糸車」を廻して木綿糸を紡ぎます。糸の太さは中々一様には出来ませんが丈夫な糸を紡ぎ「藍染め」を行います。これを「手織り機」にかけて、独特の唐草模様の「河内木綿」に仕上げるのです。本当に気の遠くなるような毎日の作業ではありますが、根気強く精を出して織り上げました。丈夫で長持ちのする実用品として大変重宝がられたものです。

今や、平成の時代にあつて、世情は荒れすさび、教育問題が国家的重大問題となりました。「何とかしなければなりません」。古き良き時代の姿を思い起こし、覚悟を決めて人間本来の素直で平穏な社会状態を取り戻さなければなりません。

諸賢のご奮闘を切にお祈りします。

### 新正会員

遠藤レイ子	小川アサ子	奥田晃枝
奥田 寛	関口一恵	関口 煜
竹下哲生	田中 守	鳥居良子
橋本昭洋	藤田博誠	横山明美
吉江勝郎	吉山 輝	

### 新特別会員

堀川 明	吉山 輝	鷺田清一
------	------	------

## 平成 18 年度 事業報告

1. 春の一般公開と音楽会 3月26日  
「なつかしい日本の名曲とショパンの調べ」  
関西二期会 ソプラノ 畑田弘美  
なにわトリオ ピアノ 吉山 輝
2. 第8回畑田塾 5月28日  
「音と遊ぼう」  
関西二期会 ソプラノ 畑田弘美  
なにわトリオ ピアノ 吉山 輝  
「身近な出来事の中にある法則—自然は整っていて美しい」  
大阪大学名誉教授 堀川 明
3. 木野雅之&吉山輝デュオリサイタル 7月2日  
ヴァイオリン 木野雅之  
ピ ア ノ 吉山 輝
4. NPO 法人「泉州佐野にぎわい本舗」文化財見学会 10月27日
5. 秋の一般公開とフォーラム 11月19日  
「哲学はおもしろい？」  
大阪大学教授・副学長 鷺田清一
6. 出版 No. 4  
「セレンディピティーを知っていますか」  
筑波大学名誉教授  
ノーベル化学賞受賞 白川英樹

### <表紙の言葉>

鮮やかな赤と緑の補色に惹かれて、庭の椿を何度かパステルで描いたことがあります。門屋のそばの白い斑点のある椿、中庭のピンクの八重と濃い赤色の木、裏庭の藪椿が今年も変わらぬ色合いで咲いています。 中村貞夫

### 役員

会 長	畑田 勇
副 会 長	甲斐 学、中村貞夫、畑田拓男
常任幹事	畑田耕一
幹 事	石井智子、笠井敏光、畑田弘美 矢野富美子
会 計	畑田庸雄

## 第8回畑田塾「身近な出来事の中にある法則——自然は整っていて美しい」と「音と遊ぼう！」に参加して

長吉小学校教諭

竹下哲生

素敵なお話をいただきました。ただ、これにつきます。最初からガツーンとききました。畑田耕一先生は畑田塾で、「なぜ学問をするのか」を、第二次世界大戦の終り近くの小学校校庭での出来事を背景に問いかけられました。それは、海軍体操（海軍の兵隊の体操を小学生向きにアレンジしたもの）を見学するために学校を訪れた陸軍中尉が「君たちの体操を見て私は大変心強く思った。しかし、体操も大事だが勉強も一所懸命やってくれ。戦争が終わった後の世界の平和のために」と挨拶されたという話です。



「なぜ学ぶのか」については僕なりに持論がありました。「学ぶことで人にやさしくなれる」、無知こそ人を排他的にし、差別させる源だと思っていました。無知の先には暴力的な闘争状態があり、戦争などもそこに端を発しているのではないかと、差別と暴力が「学ぶこと」の対極にあると私は感じていました。でも、畑田先生のお話を聞いて、私の心の中にあつた理念がすごく現実味のない空想主義的なものを感じられて恥ずかしくなりました。『君たちの体操を見て私は大変心強く思った。しかし、』のあと「その陸軍中尉はなんて言ったと思いますか？」この問いかけをしてもらってはじめて、「勉強というのは人類の平和のためにするものだ。」と心から思えたような気がしました。

この感銘を受けた衝撃に、一発目から、おなかいっぱい、もう帰ってもいいと思えるぐらいの話でした。話を聞いているうちに、なぜか「ウイ ライクネス」という言葉思い出しました。これは、学生時代に大学の歴史学の最初の授業で、僕たちに投げかけられた言葉です。先生は、なぜ歴史を学ぶのかと私たち学生に問いかけられました。その答えを「ウイライクネス」をキーワードにして探してくださいと言われました。私たちはお互いによく似ていると考えること、そのことが歴史を学ぶときに必要な態度だと。歴史を学ぶときの動因となる倫理性について言われたのかもしれませんが。その心構えの大切さを先生は言われたのだと今になって思います。そのことと、あの話の中で感じたこととのつながりとは、一言で言えばヒューマニティでしょうか。畑田さんの優しい空気感ともいべき雰囲気「学ぶことイコール平和への道」という答えとともに印象に残りました。

その感じた雰囲気とは、陸軍将校に向けられている畑田さんの目の「やさしさ」です。「陸軍将校」に対して、戦争を知らず、反戦教育を受けてきた僕らが向ける目は複雑です。その将校の「世界の平和のために学ぶ」という、当時あっては、とんでもない一言を、その軍人に対する澄み切った思いで語られていて、その将校が一人の人間として印象的に描き出されていることに新鮮な感銘を受けました。曇りない目で人を見ること、また、知識に起因する厄介なものの一つである偏見を拭い去ることも学ぶことの意味かなと思うようになりました。あの話聞いたときに唐突に『ウイ ライクネス』を思い出したのは、畑田塾頭の話にそれを感じたからだと思います。

共感性、あらゆるものが自分とつながっているという感覚、そのテーマがびびびしと伝わってきました。それは芸術が往々にして得意とするところですが、でも、そこをさらに踏み込んだ考え方があるのだらうと思います。畑田家での音楽の取り上げ方は一味ちがいます。畑田弘美さんと吉山輝さんの音楽には、体と心を一杯に楽しませていただきました。家族で前に出させてただけで素敵なお話をさせていただいたこと、とてもよかったです。素敵なお話畑田弘美さんと滝廉太郎の「花」を合唱できるなんて夢にも思いませんでした。オペラを聴くことはあっても、自分で歌うことはありませんでした。今からでも、やってみたいと思いました。今度は「花」でなく、「乾杯の歌」でがんばりたいなあ、と今まで思ったこともない夢が沸き起こりました。畑田塾で子供たちが、がんばっている様子を見て喜ぶだけでなく、自分がすごく盛り上がってしまっていたのが可笑しかったです。

吉山さんのすごい技巧と美しい調べに、すごく感動しました。アップライトピアノの上に斜めに鏡を取り付けていただいて、指先の妙技を拝見できたらなあ、と思ったりもしました。ピアノの調べだけでなく、ピアノの構造について、実物を見せながらの吉山さんのお話にも感動しました。息子などはくらくらしていた様子でした。「自然に、無理をせず、目標に向かって練習をつむ」という、上達の秘訣を問う子供の質問に答えての吉山さんの言葉には、ここにも畑田塾のテーマが、と思いました。一日ずうっと宝探しに興じているような興奮に体が包まれておりました。単に「音楽を聴いた」ではなく、「音楽を考え、音楽を感じ」、音楽との出会いにこれまでに無い新鮮なものを感じた一日でした。最初に演奏されたショパンの雨だれも、自然をどう描くのかというテーマに沿っての「雨音」であったのかなあと後からしみじみと思いました。

午後の堀川先生のお話「身近な出来事の中にある法則——自然は整っていて美しい」も大発見と新体験の連続でした。お話を聞いて私の中に大きな変化が起きました。知識もそうですが、大きく変わったのは「感覚」です。まるで、自分の体に沢山の足や腕がつけられたような感覚です。「お話を聞いた後に世界が変わって見えた」、まさにそういう経験ができました。学生の時に、寺田寅彦のことが話される文の中の「湯飲みの中に地球を見る」（畑田塾でもこの話はありまし

たが)を読み、その言葉が強く印象に残り、それ以来、僕は味噌汁を目の前にするたびに心はランドサットになるのですが、あの時以来の素敵な学びの体験をすることができました。

堀川先生の「繊維、紐、棒、台、柱」の話聞いて、空海の(密教の)修行を思い出しました。一足飛びに仏の真髓に触れる修法、阿の字を見つめ、イメージの中で大きくしたり小さくしたり、自らをマクロにしたりミクロにしたりという阿字観のことが頭に浮かんできました。「ものの名前は決められているというのが思い込みに過ぎず、大きさでなく、その振る舞いに目を向け、断面の直径と長さ(高さ)の比で定義づけられるのではないか」というところは目からうろこでした。そんな風に、ものの名前について考えたことがなかったからです。脳のレベルが一段上がったように思います。イメージを与えられることで、自分の周囲の世界に対する感じ方が変わるので。最近、新聞で、サハリンから青森に天然ガスのパイプラインが敷かれるという記事を読みました。「この重く分厚い鋼管たちも宙に漂う繊維のような振る舞いをするのか」と息子と二人で共感しました。

バネの話も興味深かったです。畑田塾からの帰り道、普段見慣れた風景の中から電線たちが「ねじれ」について話しかけてきました。「元の形にもどろうとする力が、今の自分たちの形を維持する力になって、無駄なく形を保っているのだ」と息子と二人「ねじれ探し」に興じました。もちろん、あらゆるものにバネはかくされているのですが、とりあえず、目に見える人工物の電線について考えたわけです。息子と植物のつるの話もしました。僕は、畑田塾で話を聞くまで正直言ってバネの根本的理解が出来ていなかったと分かりました。

バネといえばロバートフックですが、フックは、生物に細胞があることも発見しています。バネの法則を発見した彼がなぜ細胞だったのかなと思っていました。また、以前、フックが独自の幾何学的手法で、万有引力を解き明かそうとしていたというメモが発見されたという記事を読んだことがあります。彼の幅広い好奇心にびっくりしながら、百科全書的知識人なのかな、と思ったりもしていました。しかし、堀川先生の、「バネには静的に見えるけれど、絶えず力がかかっている状態がある」という話を聞いて、ロバートフックが生物の中にバネがあると仮定していたという話を思い出しました。また、堀川先生がバネをその場で作って振り子のように見せてくれたことで、天体間の力の秘密にあと一步と迫っていたガリレオのことを思いだし、ある考えが頭の中に浮かびました。「もしかすると、彼は、手元にあるバネの世界だけではなく、ミクロな顕微鏡的世界にも、マクロな望遠鏡的世界にもバネの存在を信じ、確かめようとしていたのではなかろうか」と。頭の中で物理のフックと生物のフックと天体のフックが繋がりました。堀川先生の話を聞いて、フックのイメージがガラリと変わりました。フックは、ただ博識を求めていたのではなく、バネ(振り子、振動)の原理で総ての世界を統一的に説明できないかと考えて研究に取り組んでいたのではないかと考えるようになりました。

ロープが自然に維持しようとする形である懸垂線とその鏡像のアーチの話にも感銘を受けました。最近、ダヴィンチコードを読んだのですが、そのなかに、アーチという技術がどんなにすごいことなのかが書いてありました。このことと、堀川先生のお話とを関連付けながら聞きました。橋や大聖堂、寺院の屋根の反り、城の石垣の稜線、きっと秘伝として継承されてきたであろうそのことがら、一本のロープから描き出されたなんて、なんてマジカルなんだろうと思いました。

そして、「機能に徹した形は美しく、強い」という先生の言葉に強く共感しました。先生のその言葉の中に「自然は無駄なく、美しい」が響いていました。僕は学生時代、美術を勉強していました。そのときに感じたことが、「機能に徹した形は美しく、強い」ということでした。紙を折ったり、切ったり、貼ったり、工作するのが好きで、その中でそう感じたのです。また、人体や動植物を描いていくなかで「それは自然の中にある」と思うようになりました。堀川先生の話聞いて、その時感じていたことに理論的な裏付けをもらった気がして、とても嬉しかったです。

堀川先生の話聞いていて、ふと、自分の科学に対する驚きの原点に思いを馳せました。記憶を辿っていくと、それは一冊の絵本でした。加古さとしさんの「つよいかたち、よわいかたち」です。紙を折っていくことで強度が変わるという事柄を身近な物を使って実験していき、本質に迫っていくという、子どもに分かりやすく書かれてある科学の絵本です。本と本の間に葉書で橋を渡して、その橋にどきどきしながら一円玉をのせていった記憶があります。自分の科学の原点へと、心は子供時代にタイムスリップしました。質問に花が咲いている様子を見て、堀川先生の話聞いて多くの大人の人が僕と同じ感覚になっているように思いました。すてきな一体感でした。

そういえば、ちょっぴり悔やんでいることがあります。細いワイヤーを長く伸ばす技術は日本が世界で最高という事実には、「ねじれ」がかかっているのかどうかを質問しようと思っていたながら質問できなかったことです。これは自分に与えられた宿題として考えていきたいと思っています。そのことに関連して思い出したことがあります。以前、縄文式土器作りをしたときのことで。粘土の上に転がす文様付け用の小さい縄をこよりの両端をよじって作りました。シンプルな中にも知恵があるなあと感心しました。日本人は、古代から「ひもをよじること」に特別な意味を見いだしていたのです。「縄」や「よじる」は、日本のお家芸なのかもしれません。だから、「日本のワイヤー=ねじれ」・・・?これだけでは答えに届きそうにないですね。堀川先生の話は僕にとって、最後まで興味の尽きない話でした。

畑田塾での一日は、大いに知的好奇心が刺激された一日でした。息子ともども、頭の中にいっぱいのおみやげをもらいました。有難うございました。

## 本年の行事に参加していただいた方々からの感想文 なつかしい日本の名曲とショパンの調べ (2006年3月26日)

畑田家住宅での演奏会はホールに比べて制約が多い。当然の事ながら、全てが演奏会のために建てられたわけではない。ならばそれを逆手にとってホールでは不可能な事を可能にする空間として活用できないか。今日の演奏会ではそれが可能なのが実証された。重厚な木が多く使われているので、強音は柔らかく、弱音は繊細に響く。このような舞台と客席の区別のない一体となる空間で身近に体験する芸術こそ文化向上に繋がると確信する。今後の畑田家住宅の無限に秘められた活用法に期待したい。 嶋崎 徹 (関西二期会)

好天に恵まれ桜の蕾も大きくふくらんだ3月26日の日曜日、畑田家住宅で音楽フォーラムが開かれた。これは畑田家当主で大阪大学名誉教授の畑田耕一氏の発案によるものである。古い木造家屋は音の吸収と反射のバランスが良く、かつ適度の残響があるという、当主ご自身の生活体験から、当家の音楽ホールとしての活用を思いつかれたのであろう。当日は羽曳野ご出身の一流音楽家 畑田弘美さん(ソプラノ)と吉山輝氏(ピアノ)のお二人をお迎えし、演奏会が開かれた。

畑田弘美さんは日本人の作詞・作曲の歌曲を吉山氏のピアノ伴奏で歌われた。日本の歌は日本の自然と人々の心や暮らしに根付いた音楽である。畑田さんの美しい歌声は住宅の雰囲気にもマッチして霧のように聴衆を包み、家の中に満ちあふれ、聴く者に深い感銘と安らぎを与えた。

吉山輝氏はショパンとベートーヴェンのピアノ曲を演奏された。堅型ピアノの音がうまく家中に響き渡るようにピアノの音響板のカバーをとり、曲想を十分聴衆に伝えられるようご自身で様々な工夫を凝らされた。ショパンの英雄ポロネーズ、ベートーヴェンの熱情ソナタなど、同氏の精緻かつ豊かな表現力にもとづく力強い演奏は聴衆を完全に魅了し、言い知れぬよろこびと感動を与えた。

畑田家住宅での畑田弘美、吉山輝、お二人の優れた芸術家による演奏では、音の波が木造家屋のあらゆる部分と絡み合い、丸く美しいバランスのとれた音となって聴衆の耳に届けられた。これは畑田家住宅がいわば「庄屋ホール」としてもうまく機能し得たことを示すものであり、今後、さらに地域文化の発展に貢献されるものと期待している。

園田 昇 (大阪大学名誉教授)

今の世で音楽を聴くには音楽ホールに出かけ、演劇を鑑賞するには劇場に行くのが常識となっている。だが、ホールも劇場もなかった往古の時代には、歌舞管絃の催しは大名・領主の居城や風流人の邸宅で行われた。古くから劇場や競技場のある西洋でも事情はよく似たもので、宮廷が楽団や劇団をかかえていたことが諸々の文献や、それに基づく小説・映画などでわかる。

先日、畑田家住宅でおこなわれた春の一般公開と音楽会参加させていただいて、ふとそんなことを考えた。すぐ目の前にある古い(古さがすばらしい)堅形ピアノで壁や障子をゆさぶるような力強い音を出すピアニスト吉山輝さん、私たち

のすぐ目の前で空気をふるわせて歌うソプラノの畑田弘美さん、五間四方の空間で出演者と聴き手が同じ空気にどっぷりと漬かる、これこそ音楽会の原点ではないか、と思った。

関口焔(フランス国立科学研究センター名誉教授)

明治に建てられた畑田家で、滝廉太郎の歌曲を日本音楽の原点を見る思いで聞かせて頂きました。サロン、集いこそ洋の東西を問わず、芸術がうまれ育つ源です。滝は、明治初期に洋楽の研究という使命を得た秀才です。里山の中で育った彼は留学先のドイツで圧倒的な異質の文明に押しつぶされようになったのかもしれませんが。彼は22歳の若さで病死しましたが、今、こうして彼の作品を畑田弘美さんの朗々たるソプラノで聞いて、日本語の深さと美しさの数々を一語一語味わうことの喜びを感じています。

吉山さんのベートーヴェンは迫力あるタッチで、これぞベートーヴェンという演奏でした。サロン風の中での激しい演奏には、ヨーロッパの貴族たちもついていけなかったのではないかと思います。ピアノシモも美しく、聴けば聞くほどその良さが感じられる演奏です。演奏後の余韻のある永い静寂には背中に電気が走りました。 福村昭裕(藤井寺市)

畑田さんの歌声に何処か懐かしい気持ちになり、心が震え、吉山さんのピアノ演奏には、素早い指の動きと迫力のある音に目が釘付けになりました。子ども達が「忙しい?」と聞くのにも、本当にそうだと思いました。初めて入る畑田家住宅に、「こんな所で?」と思いましたが、築百年を超える建物と、その中で聴くピアノの音と歌声とがとても調和して、座布団の上に座って聴くことが、何とも不思議で素敵でした。こんなに素晴らしい演奏会を、是非また開いて頂きたいと思いますが、もっとたくさんの人に聴いてもらいたいと思いますが、きっと畑田家のあの空間で、あの人数だからこそ、あの独特の雰囲気が出せるのでしょね。 石田恵美子(羽曳野市)

優れたピアノ奏者の吉山さんが魔術師のような指さばきで繰り広げられるショパン、ベートーヴェンの世界、明治、大正、昭和と、懐かしい歌曲を暖かな解説と共に、聞かせてくださるオペラ歌手畑田さん、今回の音楽フォーラムは「素晴らしかった」の一語に尽きます。アンコールで歌われた“タンホイザー”の歌曲は圧巻でした。最初、旧家のたたずまいと音楽フォーラムはどう考えてもミスマッチとしか思えなかったのですが、築百年を超える古い家屋の持つ魂が、偉大な音楽の母なる抱擁をもって、どんな共鳴も逃がさず、すべてを耳に届けてくれました。音楽の殿堂が木と紙の旧家に打ち建てられたのです。これがあこがれてやまない文化の姿だと思いました。 石田美津恵(羽曳野市)

伝統的な建築と歌曲が好きの私には、とても素敵な音楽会でした。畑田家が持つぬくもりのある雰囲気のなかで、懐かしい唱歌が、分かりやすい日本語の発声で歌われたので、聞いている私も歌に合わせて心の中で歌っていました。そして、最後に「故郷」を参加者も一緒に歌ったときには、多くの方が自分も歌えるという喜びで大きな声で歌い、とても盛り上がりました。今後も、このような親しみのある音楽会が開か

れることを期待しています。

雪永重夫

## 第8回畑田塾 (2006年5月28日)

生まれて初めて音楽会に参加しました。ふだんはCDやレコードでしか聴いたことがないので、とてもとても迫力がありました。歌手の畑田弘美さんは歌声がすごくきれいで私もあんな声になりたいなあ～と思いました。堀川先生の理科の授業は橋の形がおもしろかったです。この話を聞いてから、橋の形がとても気になるようになりました。今回の授業は、とても勉強になりました。また時間があったら参加したいです。

中村春香 (狭山東小5年)

ピアノの構造を見て、ハンマーでたたくと、音が出るのが、弦の長さによって変わることを始めて知って、「へえ、そうなのか」と思いました。いろいろと質問させて頂いて有難うございました。堀川先生の話は、よく分からなかったけれど、覚えていたら、高校ぐらいでわかると言っていたので、なんとか覚えていようと思います。

竹下賢也 (小学生)

畑田弘美さんの歌が素晴らしいと思えました。また、ピアノの中が見られて楽しかったです。ピアニストの吉山さんが鍵盤を左から右まで弾かれるときのスピードがとても早いのにびっくりしました。堀川先生の話は難しかったです。最後の畑田耕一先生の形状記憶ポリマーの実験はとっても面白かったです。

吉川 (小学生)

先日は充実した時間を子供達共々過ごさせて頂き本当にありがとうございました。子供たちにはすこし難しかったかもしれませんが、先生が言っておられた様に、10年後、20年後に理解できれば良いと思えますし、その時「あんな一流の先生方のお話をお聴きできたんだ」と思える子供に育ててほしいと思います。そして、たとえその時からでも学ぶ楽しさに目覚め、自分なりに何かを学ぶ事をしながら生きて行ってくればと、親として願っています。私はつね日頃から「学校の勉強は基礎であって、大人になってからも何かを学ぼうという気持ちを忘れないでほしい。その事が人間の幅を創ってくれるし、そういう大人が人間として魅力的な大人と思えるよ。そして、とっても楽しい生き方だと思うよ」と話しています。先生方が、将来を見据え、日本のため、世界のためにこれからの子供たちにいい影響を与えて行きたいと考えて、畑田塾を開いておられる気持ちが素晴らしいと思います。子供を持つ親としてとてもありがたく、これからも頑張りたいと思います。

堀川先生は「とにかく人間は自分の背丈、自分の目線で物事を見がちであるが、それを越えたもっと大きい視点でものを見、考える幅を持つことが大切である・・・」という様なことを言っておられました。私も、自分の子供も含めて全ての子供たちに、そういう大人になって行ってほしいと思います。また、常々、自分もそうありたいと願っています。

畑田耕一先生のお話の中にも「小川のせせらぎの音で水の温度の違いを感じる事の出来る感性を持ってほしい」とおっしゃった言葉も心に残りました。母である私の方が子供以上に楽しい想いをたくさん持たせて頂きました。本当に有難

うございました。吉川由美 (吉川君のお母様、羽曳野市)

畑田塾のことを知ったのは数年前、小さな新聞記事からである。確か塾生の募集記事であったように思う。この時から畑田塾のことが気になっていた。いつか機会があれば訪れたいとひそかに心に温めていた。実現したのは、今年3月26日音楽フォーラム「懐かしい日本の名曲とショパンの調べ」への参加からである。受付のそばで、にこにこ履物入れのビニール袋を配ってくれていたお嬢さんがいたので声をかけた。「ご苦労さん、ボランティアでやってくれてんの?」、「わたしここの家の者です」、「そう、家族親戚みんなで応援しているのやねー」、「そうです」、「がんばってねー」、「はい」頷いてくれた彼女の顔を見ながらこちらに参加してよかったと心から思った。彼女だけでない。それぞれの係をしてくれている方々が温かいのだ。そんなスタートだから音楽フォーラムが心にしみたのは言うまでもない。

続けて5月28日の畑田塾「音と遊ぼう」、「身近な出来事の中にある法則」に友人達8名で参加した。なぜか故郷に帰ったような気分だ。昼休み、畑田家の中庭でまるくなって手作り弁当を頂いていると、当主がずっと近づいて来て、おもむろにポケットから小さなオルゴールを取り出し、小さな、でも、美しい音色を聴かせてくれた。日頃ポケットにオルゴールを忍ばせておくなんて、なんとリッチなのだろう。

帰り道、参加してくれた仲間感想を求めたところ、次のような内容が述べられた。「さすがにいい気持ちになった」、「子供たちの未来に期待を寄せて、丁寧に、真摯に子供たちと向き合い、自らの経験・体験を惜しみなく伝授されている姿に、ゆとりとはこういうことをいうのだろかと思った」、「『さりげなく』でありながら『凄くことをやっている』、この「さりげなく」が生涯学習の原点だと思う」、「一流の方のお話や演奏などに直接触れられるのが良い」、「畑田家の歴史ある家屋がベースになっているので、落ち着いた中で常に時間軸を意識できる」、「何か応援したくなる雰囲気がある」、「みんなが素直な気持ちになっている」、「中心になっておられる方々に、品が感じられる」などであった。

神野武男 (八尾ニューモラル生涯学習クラブ)

## 木野雅之/吉山輝デュオリサイタル (2006年7月2日)

木野雅之・吉山輝両先生の間近で、両先生が演奏なさるブラームスの提琴ソナタ3番を拝聴する。それも120有余年の風雪に堪えた有形文化財の旧家「畑田家住宅」で。何と心憎い企てではないか。教養主義が青春多感の胸を熱く焦がした戦後間もない昭和20年代、大阪中之島の旧朝日会館を会場とするAGOTの演奏会に馳せ参じた頃の、興奮の再来よと、ときめきを覚えながら7月2日の午後を待ち望んでおりました。

モーツァルトから夭折の偉才渡邊茂夫のソナタを経て、ブラームスの二短調ソナタに至り、樂興はその極に達しました。拝聴する者の緊張と、演奏者の裂帛の気合いを、古民家の木組みと和畳の素朴で温かい雰囲気が柔らかに受け止め、絶妙の臨場感を醸し出しました。演奏者のお人柄と申せましょうか、外連味を排した懐の深い演奏で、鋭く澄んだ弦の響きの

底流にある情感の温みを、丁寧に拝聴する者のころにお伝え下さったことは感謝に堪えません。そして、ブラームスの思索的なソナタの演奏の中で、緩急息詰まる一瞬の、練達の技の冴えによる間合いの妙にも魅了されました。

微妙な音の変化に感応する古民家材に包まれた座敷内で、木野・吉山両先生のご演奏を、一間（いっけん）と間を置かぬ距離で拝聴する妙味。さながらモーツァルトをその館に招いたマンハイムのテオドール侯そのものに似た自分が、時空を超えてここにある幸せ、とでも言うべきでしょうか。いわば、まこと耳福の一日でした。 三軒 齊（姫路市）

歴史を重ねた国の登録有形文化財「畑田家住宅」の長屋門をくぐり、高い天井を眺めながら主屋に導かれた時、何代と引き継がれてきた人々その心の温もりと安らぎという人情の機微にふれました。悠久のときを経た古のたたずまいと新しい潤いの香りを胸に、ヴァイオリンとピアノの奏でる美しい音韻が静かにゆったりと家屋の空間に響き合い、なんともいえない清新な至福の世界に快く浸れたことを感謝いたします。人々の日常の営みが、地域の自然や風土と融合して醸し出される風景を文化的景観といいます。伝統的木造建造物として文化的景観を有する「畑田家住宅」は、単に静態保存に留めることなく動態保存のために、畑田塾を開設し、また講演会やフォーラムを開催して、人々が相集う空間の場を提供しておられます。それは、この家が文化の伝承と深化に貢献する知的空間であるとともに、人間形成のための「住育」環境でもあることを示唆しています。 東山忠史（羽曳野市教委）

木野雅之・吉山輝デュオリサイタルは木造住宅でのヴァイオリンとピアノの演奏であり、音の響きが楽しみでした。昭和16年生れの天才少年渡辺茂夫の曲は、少年の作曲とは思えない素晴らしさで、お二人の息の合った演奏に心の激みがすべて飛び去り、心地よい時間を堪能しました。生演奏をこんなにも近くでゆっくりと聴く機会は今までになく、感動の連続でした。モーツァルト、サラサーテ、貴志康一、ブラームスの音楽にも、CDで聴くのとは違った音の広がりを楽しめました。これからも、畑田家での、素晴らしい方々との出会い楽しみにしております。 横山明美（放送大学）

畑田家住宅での演奏会では、木野さんと吉山さんがデュオで演奏してくださいました。私は、時々コンサートを聴きに行きますが、歴史のある家で演奏を聴くのと、コンサートホールで聴くのとでは、一味ちがって良かったです。私が一番心に残った曲はブラームスのヴァイオリンソナタ第3番でした。二人の息がぴったり合っていて「素晴らしいなあ」と思いました。質問できる時間もあって、とても良い楽しい時を過ごせました。 比奈本 茜（中学3年）

小学校の時に社会見学に行った畑田家で、木野雅之さんと吉山輝さんのデュオリサイタルを聴きました。一番印象に残った曲はツィゴイネルワイゼンです。私も早く弾いてみたいと思っている曲だからです。渡辺茂夫さんが弾いていたヴァイオリンで、渡辺茂夫さんの曲を聴けたのも良かったです。

比奈本 香（中学1年）

## 哲学はおもしろい？（2006年11月19日）

初めてお訪ねした立派な旧家の雰囲気にも懐かしさを感じ、子供の頃の記憶がよみがえりました。古く懐かしい大きな空間で、かた苦しくない雰囲気につつまれての鷺田先生のお話はとても親しみやすく、知らず知らずに引き込まれて楽しく拝聴しました。哲学は身近なものであることを確認し、「考えること」の大切さを再認識しました。哲学は、今の日本のすべての世代の一人ひとりの人生に大変大事なものであると痛感しました。人と自分の違いを認め合うことが大切であること、また本当の意味の成熟を目指そうというお話も心に残りました。心が広がった気分です。モラルの欠如は、その根底に哲学がないためだと思いました。3時間のフォーラムは、時間を忘れて楽しく、充実したものでした。

増山幸男、海堀清孝、神野和子（八尾市）

畑田家での哲学のお話、凄く楽しいひと時でした。当主の畑田耕一さんの持つ何ともいえない洒脱でアカデミックな雰囲気と伝統的な日本建築の建物が醸し出す心安らぐ雰囲気の中で、これまた鷺田教授の哲学者とは思えない、町のおっさんの風貌が語る人生の哲理が素晴らしいハーモニーを奏でて、時の経つのを忘れてしまいました。心を打つ一言は「自分の信じることをすることが哲学だ」でした。これからも楽しみにしております 小林勝利（八尾市）

先生のお話を聞いて、ポーランドでショパンの心臓を安置してある、という話を思い出しました。西欧では、心と身体は別で、身体は唯、物質にすぎないと考えということ、それで、遺体を切り開いて、大切な心臓を祖国に持ち帰るという行為が、やっと理解できました。日本人にとって、そんな残酷なことと思えることも、根底になる思考が違っていると、表に現われる行動も、本当に異ってくるものが、よく分かりました。 関口一恵（吹田市）

鷺田先生のご意見は時々新聞紙上などで接して共感することが多いが、今回はじめて先生のお話を直接聞く機会を得た。誰にでも分かる平易なご説明と豊富な話題、その話術に感服した。世界の諸言語はみなその社会文化史的な背景がちがうため、同じようなもの（こと）を指す単語の意味や用途の広がり異なる。そのため、哲学の概念を日本語であらわすには、人口的に専門語を作らねばならなかった。お話を聞きながら考えたことだが、「哲学」という言葉も明治期のおそらく西周による造語だろうか。しかしフィロソフィーとはもともと「好んで智を求めること」、これは誰もが心がけるべき求道であって学ではない。せめて「哲理」（「物理」という言葉がある）とでも訳して欲しかった。（学問としての哲学を強いて区別するなら「哲学」とよべばよい）それを「哲学」としたために、日本ではフィロソフィーは各個人が平生培うものではなく、単に専門家だけが振りまわす「むずかしい学問」になってしまった。これを見ると、ことばには意味と用途のほかにそれらを固定するイメージもあるらしく、むずかしい宿題を残された思いだ。鷺田先生はどう思われるか、伺いたいものだ。

関口 焔（フランス国立科学研究センター名誉教授）

## 「子供たちの眼に輝きを」—畑田塾の更なる発展を願って—

元大阪府立大手前高等学校長 緒方淳子



私は、中学校・高等学校の主として理科教師で45年過ごして来ました。公立も私立も経験しました。その中で実感したことは、生徒にとって良い学校とは良い先生が集っている学校であるということです。授業を通して生徒の知的好奇心を呼び覚まし、未知の分野に関心を向けさせ、学ぶ意欲を目覚めさせ、やがて学ぶ喜び、探究する楽しさを体験させることのできる先生が良い先生だと考えています。教師自身が知的好奇心旺盛で、よく勉強しなくてはならないし、熱心で授業方法にも工夫を凝らさなければなりません。しかも人柄も良い、こんな先生に教わる生徒は幸せです。

畑田塾は、いろいろな分野でご活躍中の専門の方を講師にお招きして、小学生や中学生にお話を聴かせるという、畑田耕一先生の破天荒な発想で開かれた塾であります。一回のご講演、しかも専門家のお話ということで、子供たちにとって内容の理解は不十分でしょう。しかし広い分野からの講師の先生方は、専門を極められた方ばかりで、しかも質問に答えて下さる。そのお話や雰囲気から何かを感じ、胸に響くことがきつとあって、子供の内部に何か積極的なものが発芽するのではないかと私は思います。子供たちは畑田塾で、良い先生に巡り会えたのです。

良い先生に巡り合うことの次に、重要なことは、学ぶ場所です。立派な建物でも、金属とコンクリートの無機質ばかりでは、心が満たされない。窓の外に緑の葉を一杯つけた樹木が見えればつい眼がそこへ向くでしょう。私は、古都奈良にある奈良女子大学を卒業しました。奈良は文化遺産にも自然にも恵まれた所です。2009年に創立100周年を迎える大学ですが、創立当時の建物が残っています。正門を入り守衛室に声をかけ、正面を見ると、木造の凝った造りの2階建ての記念館が見えます。正門、守衛室、記念館共に重要文化財なのです。薄緑に彩色されていてキャンパス内の木々とよく調和しています。100年近く、同じ風景なのです。記念館の2階は講堂になっていて、奈良女子高等師範学校として創立された当時の厳肅な雰囲気を味わうことが出来ます。学会などで訪れられた国内外の方々も使用されていて、心地良い忘れ難い印象を持たれるようです。私が学んだ化学棟は、木造の平屋でした。先生方の講義、学生同士の交流、一日籠っていた実験室、学んだ日々が、校庭を逍遥する奈良公園の鹿や、木陰を作る木々とともに、昨日のこのように甦ります。

さて、畑田塾の教室はどうでしょうか。江戸時代に原形があり、明治に再建された庄屋屋敷で、長屋門をくぐり、井戸や廁を横に見て母屋に入り、土間に立って見上げると、立派な梁がつつやと光り、つし二階も端が少し見えて、昔からの道具類が収まっているらしいと分かります。床も高く、縁の下にも入れそう、土間の端に置いてあるあれは何に使うものかな、畳の部屋の向こうはどんな部屋が続いているのかな、奥深そう、二階にはどこから登るのかな、たちまち子供たちの好奇心は刺激されます。この家に住んでいた昔の人はどんな生活をしていたのだろう、あの庭の向こうの建物で何をしたのかな・・・と際限なく興味と関心は広がります。そうして漠然と歴史と文化の香りを感じて畳に行儀よく座って講義を聴く。子供の後ろや横にいるお父さんやお母さんと、家に帰ってからの話題は尽きないことでしょう。なにしろ、畑田塾は登録有形文化財を教室にしているのです。なんと贅沢な塾でありますことか。

私は、職を退いて時間ができて、第3回畑田塾から参加しています。その折にお隣の中学生とお母さんをお誘いしました。しっかりお話を聴き、最後の焼き物も嬉々として作っていました。その子は理系大学に進学しました。畑田耕一先生が、ご自分の生家を有能な人材の卵の育成に役立てたいと実践されている畑田塾は、成果を上げ、年々発展しています。一般公開、フォーラムとあわせて企画運営には大変なご苦労がとおありと拝察します。教育の原点を探らねばならない昨今、稀有の存在たる畑田塾の灯がますます輝きを増しますことを、感謝の気持ちをこめて心から願っております。

### 平成18年度 会計報告

#### 収入の部

繰越金	205,101円(前年度繰越金)	講師謝礼	320,000円(7名)
会費	724,000円(362口)	アルバイト料	51,900円
寄付金	182,000円	資料作成,印刷費	548,901円(資料,年報,出版)
雑収入	38,755円(絵葉書,しおり)	通信費	21,833円(郵送料,手数料)
合計	1,149,856円	事務費	13,617円(事務用品)
		雑費	56,280円(講師接待,他)
		繰越金	100,865円(次年度繰越金)
支出の部		合計	1,149,856円
借料,損料	36,460円(机,椅子)		

**あとがき** 厳しい世相の此頃ですがお元気にお過ごしでしょうか。年報 No. 6 をお届けします。保存会の活動も6年目を迎え、一つのスタイルが出来つつあるようです。講師の先生方、参加される方々、ご支援いただく皆様のお力添えのたまものと日々感謝しています。貴重な会費とご寄附を心して使わせていただいております。(S.N.)

**事務局** 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話072-955-4380

会費の納入は郵便振替(口座番号00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。